

附属駒場中・高で第32回教育研究会が開催される(11月25日~26日)

—シンポジウムのテーマは「高大連携の成果と課題」—

附属駒場中・高等学校 梶山正明

附属駒場中・高等学校では、毎年11月に教育研究会を開催し、日頃の研究活動の成果を広く教育関係者に公開しています。今年も、25日午後10時、高校の公開授業と教科別研究協議会を、26日午前10時シンポジウムを行いました。

公開授業は、国語、社会・公民、数学、理科、保健体育、美術、英語の各教科で実施しました。このうち数学と理科(化学・生物)は、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)関連の授業・実験、社会は中学総合学習のテーマ学習「メディアリテラシー」、美術は高校総合学習のセミナー「美術解剖学入門」を公開しました。研究開発学校指定4年目を迎えたSSH「先駆的な科学者・技術者を育成するための中高一貫カリキュラム研究と教材開発」と総合的な学習の時間への取り組みは、本校が最も力を入れている研究・実践活動です。

シンポジウムは、SSHで大学と連携による事業を数多く実践してきたことを踏まえ、「高大連携の成果と課題」というテーマで実施しました。パネリストにはSSH事業の運営指導委員として、渡邊公夫氏(筑波大学数理物質科学研究科・アドミッションセンター教授)、大嶋建一氏(筑波大学数理物質科学研究科教授)、小林悟氏(岡崎国立共同研究機構教授)をお迎えしました。司会の熊倉啓之氏(静岡大学教育学部助教授、元本校数学科)による進行で、各先生方から高大連携の具体的な実践例や高大連携のねらいと望ましい形態などについてお話しいただき、プロの参加者も含めて討論を行いました。「高校と大学は対等に、気軽に大学の先生に声をかけた。」というパネリストの方々の言葉に、高大連携事業を進める元気を得た参加者も多かったようです。

教育研究会の概要については、本校WEBページもあわせてご覧下さい。
http://www.sakura.cc.tsukuba.ac.jp/~soumuhp/official/



産学連携セミナー報告

附属学校教育局 菅野和恵

平成17年11月26日(土)に、日本教育会館(東京・神保町)において、附属学校教育局と時事通信出版局の産学連携セミナー「試験問題から見る教員採用の現状と課題—教員採用試験における「良い・悪い」とは何か?—」が行われた。セミナーにおいて、附属学校教育局が時事通信出版局との産学連携事業として、平成16年に全国で行われた教員採用試験問題を分析・評価した研究成果が発表された。

セミナーは、二部構成で行われた。第一部の、「教員採用試験問題の分析評価」では、田中統治氏(本学人間総合科学研究科教授)による就職教職と一般教職に関して、また、泉原 隆氏(同上)による論作文と面接および実技の分析・評価の報告が行われた。さらに、附属学校教員百数十名によって分析・評価された学校種別・教科別報告がなされた。それぞれ別の報告において、全体的な出題傾向、良問例、悪問例が提示され、今後の教員採用試験のあり方が具体的に提案された。

第二部は、「教員の資質能力をどう見極めるか」のテーマでパネルディスカッションが行われた。谷川彰英氏(筑波大学附属学校教育局教育長)をコーディネーターとし、第一部での発表者に加え、八尾敦修氏(九州大学大学院教授)、桑野茂樹氏(大阪府教育委員会小中学校課首席指導主事)をパネリストとして迎え、これからの教員に求められる資質能力が、活発に討論された。



会場は、大学関係者に加え、現場の教員、教育行政関係者で埋められ、本テーマに関する関心の高さがうかがわれた。教員採用のみならず、今後の教育のあり方を考えさせるような真剣で熱意あふれる意見が多量に出され、大変有意義なセミナーとなった。

退職の弁

附属駒場中・高等学校校長 千田捷照

39年間、有り難うございました。

附属駒場中・高等学校校長 服部次郎



39年間の教師生活を打とすとしております。大学を出てすぐ教員になり、都立高校(職業高校と普通科高校、全日制と夜間定時制)を経験し、地域的には下町・都心・多摩・島嶼と巡り、最後の3年間、筑波大学と附属駒場に在籍させていただきました。いろいろな経験をさせていただきましたが、全くの门外漢である私は養護学部に着いたものの、戸惑いや驚き、発見の連続でした。しかも、ここにも昨昔を担い、明日に向かって今日を生きてる子供たちの姿がありました。子供への愛情に押しきれ、子供と家族の幸せのため、自分の生き方のため戦い続ける保護者がいました。そして、あきらめることを知らない教師がいました。附属学校を支えてくれる附属学校教育局と筑波大学の重層的な支援の厚さと育ちの高さを感じ、これまで経験したことのない所属意識や誇りを感じながら仕事をすることができました。

それだけに、学校現場を離れたことのできなかつた者として、今、附属学校と大学が直面している状況について一言触れたいと思います。全がある時の小さい政府と規制緩和なら大いに歓迎もするでしょう。

私は、1967(昭和42)年の春、東京教育大学を出て、附属駒場中・高等学校の社会科の教員になり、以来39年間、筑波大学にお世話になりました。4年前に、大塚のE館に研究室をいただき、そこに置かれたというパイプ椅子の裏にマジックの手書きで「倫理」と書かれていたのを見たとき、青春の古果に戻ってきた感覚に浸ったものです。39年間、本当に有り難うございました。

39年の内、前半の25年くらいは、演劇部の部活指導に燃えていました。夏休みは、毎日のように、部員と走っていました。62歳の今でもスローができるのは、この時代走り込んだからだと思います。

埼玉県大会では毎年上位入賞を果たし、無名の筑波演劇名門校になりました。全国大会には行けなかったのですが、関東大会出場やグループ座出演は、華やかな思い出です。この時代



うが、気の遠くなるような巨額赤字を抱えてしまったから規制緩和と自由競争を当然のことと言われたものがあります。自立精神の成熟した市民社会と富の再配分システムの新構想を前提にしないと、相関つながらない教育・福祉などの分野には高い負荷しかかかっていないということになりかねません。自己責任と自由選択は、経済的な裏付けと十分な情報提供が不可欠です。

国立大学「法人化」の真相が見えてくるに連れ、自在な発想と確かな視力と、機動力のある組織の対応と細心にして大胆な行動力の大切さを痛感してきました。

大学と附属学校の益々の発展を願いつつ、「あいつら、あかひかきのみ、きれいだな」(本校児童作品)の清澄さを頂いて卒業いたします。

には、学校経営とか附属学校の使命とか、そんなことはまったく考えていませんでした。信じられないくらい、いい時代でした。

後半の15年くらいは、私の教師生活はガラッと変わりました。15年くらい前に坂戸高校が潰れそうになって、ちょうどその頃私は40代後半の中堅世代だったので、出しゃばって仕切っている内に、学校改革のリーダーの肩にのしかかっている、あれよあれよという間に、いつの間にか副校長になっていたのです。高校学校改革の目玉としての総合学科改編という時代の波に乗り、なんと潰れかけた坂戸高校を立て直したと思っています。

と思ったのもつかの間、法人化というさらに激しく大きな波が押し寄せました。このときに、難破船から真っ先に逃げ出す船長のようなカコロウイことになってしまいました。このたび転出の話がまとまり、定年一年前ですが、この春に退職させていただきますことになりました。39年間、本当に有り難うございました。附属学校教育局並びに各附属学校の発展をお祈り申し上げます。

私の学校の名物先生 vol.4

附属聖学校の名物先生 —唯野玲子先生— 今井二郎

附属聖学校にも「名物先生」は多い。教科指導や部活指導その他様々な分野で力を持っている個性的な先生が多い。どの先生を紹介するか迷うところだが、今回は高等部の唯野玲子先生を紹介したい。

唯野先生は、高等部の地歴・公民担当の裏の先生で、本校高等部の卒業生でもある。先生は生徒たちに「書から入る情報を大切にしない」と誓い、補聴器をつけて目障りしなく聞えない内容を耳を向ける力で補うことができるほどだと伝えている。また先生は、聞こえる職員とのコミュニケーションを、手話と「声」、そして「筆談」等様々な方法を駆使して確実なものにしている。「私が聞こえる先生方とどんなふうに情報を共有して仕事を進めているのかを、生徒に実際に見せることが大事。それが、将来聞こえる人と共生していく生徒にとって重要な勉強になる。」というのが唯野先生の持論である。並々ならぬ使命感と生徒に対する愛情をもって教育にあたられている先生である。

…こんな風に書くと、ガチガチの近寄りたいたい先生に思われるかもしれないが、実際はモーションにあふれ、優しい雰囲気のある先生である。生徒はもろにこのこと、職員も何かと頼りにして相談に行くことが多い。筆者もその中の一であるが、唯野先生と話していると、悩みがいつの間にか「教員」話になっているところがある。周りの人を前向きにさせてくれる唯野先生の明るい声

